School Report

多摩大学目黒中学校・高等学校

“きっかけ”ちりばめ夢への道拓く教育を

自分が心から夢中になれることを見つける6年間。文武両道をモットーとする多摩大学目黒中学校・高等学校では、授業はもちろん、学校行事、部活動、さらには校外学習、国際交流と、さまざまな体験を通して生徒自身が成長できる環境を整えている。同校の教育について、田村嘉浩校長に聞いた。

多摩大学目黒中学校・高等学校
田村 嘉浩校長（田村学園理事長）

向上心引き出し塾なしで現役合格

近年、大学合格実績を着実に伸ばしている同校。その背景にあるのは、生徒一人ひとりに対するきめ細かな対応だ。

「子どもたちは一人ひとりかけがえのない能力を持っています。勉強が得意な子もいれば、部活動での能力を開花させる子、学校行事でリーダーシップを発揮する子など、それぞれ異なる力を見つけ、伸ばすのが学校の役割です。夢中になれることや目的を見つければ、生徒は自ら伸びる。本校では生徒の〝やる気〟を引き出すことを意識し、さまざまなきっかけを用意しています。それが大学合格実績にも表れているのだと思います」と田村校長は語る。

同校では入学直後から、総合キャリア診断プログラムや卒業生座談会、進学イベントへの参加など、独自のキャリア教育を展開。同時に、自らが志望する大学への合格を勝ち取るための学力を身につける取り組みにも力を入れてきた。中学では、生徒の習熟度に合わせて特進クラスと進学クラスの2クラス制を採用し基礎基本を徹底的に学習。その学力を足掛かりに、高校では大学入試に即した授業で大学入試に備えている。特に特進クラスでは、基幹教科の学びは高2までに終え、高3では豊富な選択科目の中から、多様な進路志望に対応した演習中心の授業を行っている。

加えてSSL（Super Students Learning Center）という「すべて学校内で完結させる」ための学習支援システムを用意している。SSLでは学習シラバスや実際の授業進度に連動、朝テストや毎週行われる到達度確認テストを通して、生徒一人ひとりの理解状況を把握。そのうえで常駐の指導員がそれぞれに最適な学習計画を作成し、生徒の自学自習を全面的にサポートしている。SSLは夜9時まで開放されており、部活動の後にここを利用する生徒も少なくない。こうした環境により、塾に行かなくても難関大学に現役合格する生徒が年々増えているという。

大学と連携社会とつながる学び

合格実績を伸ばしたもう一つの理由に、田村校長はICTの充実を挙げる。

毎日の勉強を全て校内で完結させるラーニングセンター

「本校では5年前から生徒全員にタブレット端末を持たせ、教室にプロジェクターを設置するなど、早くから教育の情報通信技術（ICT）化を進めていました。おかげでコロナ禍でのオンライン授業への移行もスムーズでしたし、生徒に対してよりきめ細かい対応ができるようになりました」

日々の授業や宿題の配信だけでなく、家庭学習の状況を毎日入力することで、生徒一人ひとりの学習進捗状況を丁寧に把握。生徒・教員間の連絡手段としてもタブレットは大いに機能している。

「もともと本校は、教員と生徒の距離が近く、何でも相談できるという信頼関係ができあがっていますが、タブレットでのやりとりでは1対1という感覚が強く、学校内以上のコミュニケーションの場になっているようです。学習の進捗状況を見て生徒の努力を評価するだけでなく、個々の悩みや不安に寄り添い、適宜声かけやアドバイスを行うことが、今まで以上にできるようになりました。それが生徒の学習意欲を引き出し、学力の向上につながっています」

ICTと並行して、授業の中心に据えたアクティブ・ラーニングも進化を続けている。大切にしているのは、主体的に考える習慣を確立するための授業だ。

「基礎となる学力を身につけたうえで、今後は自分で考えたり、自分の考えを人に伝えたり、みんなで何かを仕上げていくといった力が必要になってきます。そのため本校では、アクティブ・ラーニングを積極的に授業に取り入れ、自ら調べ、発表する機会を多く設けています」

授業だけでなく、学校の外にもアクティブ・ラーニングの場を設けている。その大きな柱となっているのが多摩大学との連携だ。多摩大学は産業界出身の教授が多く、実業界とのつながりも強いため、企業と共同でいろんなプロジェクトを実践的に展開している。同校では付属校のメリットを生かし、大学の教員による講義を実施。プログラミングや投資戦略についてなど、現実に即した学びを体験できる。

講義以外にも中3～高2生が大学のゼミに参加し、大学生と一緒にフィールドワークを行うといった活動を盛んに行っている。毎年12月には大学でゼミごとの発表会「アクティブ・ラーニング祭」が開催されており、毎年大学生に交じって10チーム前後が発表を行っているそうだ。

「校外での活動は生徒を大きく成長させてくれます。投資戦略の講義を受けた後、『お父さんの会社は一部上場企業なんだね』というところから親子の会話が広がったという話も聞きましたし、過去には韓国人の先生の講義をきっかけに済州島で行われる世界フォーラムに参加させてもらったこともありました。またイベント型企画に参加したり、アクティブ・ラーニング祭で大学の先生からの質問に答えるなど、学校内では体験できないさまざまな経験が生徒の視野を広げ、知的好奇心を育んでいます」

さらに大学生という身近なロールモデルに接することで、生徒は将来・進路への意欲を高めていく。一方大学生側にも、中高生と一緒に活動することで知識を体系化できたり、年長者としての自覚が芽生えるなど、高大連携はWIN-WINの関係で成り立っているという。こうしたコラボから、新たな発想が生まれるのを期待したい。

文武両道で可能性を広げる学校生活

生きた学びを通じて生徒の成長につなげる方針は、同校独自の国際教育にも通じる。専任のネイティブ教員は授業だけでなく、朝礼や部活動、学校行事でも生徒と関わる。間違ってもいい、どんどん話そうと呼びかけるネイティブ教員の働きかけと、さまざまな場面で気軽に英語でコミュニケーションを取れる環境が、外国人と話すことへのハードルを下げてきた。現在はコロナ禍で中断しているが、中3のオーストラリア修学旅行をはじめ、2カ月から1年までさまざまな期間の留学プログラムも用意している。

勉強面だけではなく、同校ではクラブ活動や学校行事などにも力を入れている。中学生と高校生が一緒に活動している部も多く、サッカー部やダンス部など、全国レベルの成績をあげている部も少なくない。兼部も可能になっており、多くの生徒が自分の興味のまま、積極的に部活動に取り組み、自分の世界を広げている。

改めて同校が目指す生徒像について聞いてみた。

「生徒の成長に一番必要なのは目的意識です。本校が目指しているのは、自分自身が成長することを楽しめる人を育てること。中学・高校は人間として最も成長する時期ですが、意識的にがんばらないと流されてしまう。特にこれからは、みんなで同じことをやればいいという時代ではありません。自分のテーマを見つけ、探求し、自分なりの答えを見つけることが重要になってきます。自発的・積極的に学校生活に取り組むなかで、この大学に行きたい、こういう勉強をしたい、こういう職業に就きたいという目標を見つけ、ひたむきに努力する。そうすればいつの間にか目標に届いているはずです。

そして大学入試で燃え尽きてしまうのではなく、大学入学後、社会に出てからも常に目的意識を持ち続けて欲しいと思います。世の中の変化に対応し、たくましく生き抜く力を身につけ、成長を続けて世界に羽ばたいていける、そんな生徒を育てたいですね」

夢の実現を手助けする学校として、多摩大学目黒をより進化させることが校長としての私の目標。そう語る田村校長に、受験生へのメッセージをもらった。

「中学では新しいステップがどんどん拓けていきます。私たちは皆さん一人ひとりの関心や興味に応えられる準備を整えて待っています。ぜひ本校で、自らの目的を見つけてください。私たちとともに夢の実現に向けて歩んでくれる受験生を待っています」

写真左／ネイティブ教員による授業風景

写真下／多摩大学で行われたアクティブ・ラーニング祭（AL祭）。大学生に交じり発表を行う

全国大会に12年連続出場の中学ダンス部

本記事は、「日経マガジン教育特集号」2022年1月21日発行号より抜粋したものです。